

2023年に発足予定の「子ども家庭庁」では基本政策の一つとして「就学前のすべての子どもの育ちの保障」をうたっている。それには、就学前の子どもにも施設を問わず質の高い教育・保育を提供できる体制の整備が欠かせません。

これまで日本では就学前の子どもに関して「預ける場所の不足」という量的な面が課題とされてきましたが、近年保育所等の整備が進められ待機児童数は減少傾向にあり、質的な充実に転換する必要があります。

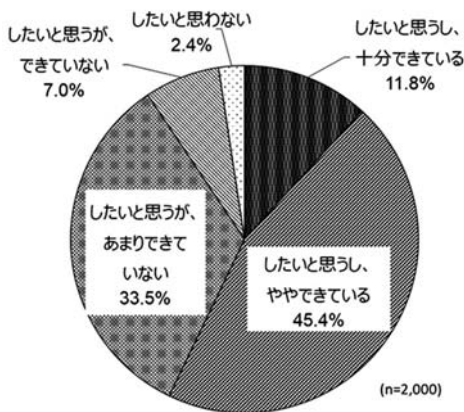
66

明日への力

日本総合研究所

リサーチ・コンサルティング部門

マネジャー 小幡 京加



出所：株式会社日本総合研究所

就学前教育・保育の質向上に向けた課題と方策

就学前の豊かな経験が後の人生に大きな影響を与えることは近年の研究等でも明らかになっており、「保育所・幼稚園等における集団保育においても、子ども主体であること、そのために子ども一人一人への寄り添いが重要となります」。

本稿では、株式会社日本総合研究所が実施した「保育の質に関する保育者向け・保護者向けアンケート調査結果」（以下、アンケート調査結果）に基づき、保育者・保育士・幼稚園教諭および保護者の保育の質に関するニーズについて考えてみます。

保育者アンケート調査結果によれば、保育者自身の理想に照らして九五・二%の人が子どもへの接し方に何らかの課題を感じていることがわかり、課題としては「子ども一人一人に丁寧にかかわること」が最も多く五〇・三%でした。

集団活動の中で子供に寄り添って支援できているかどうかを尋ねると、「あまりできていない」が三三・五%でした（図表①）。その要因は「職員人数不足」が四八・三%、「事務等の業務量の多さ」が四二・六%、「保育者間のコミュニケーション不足」が二八・九%

でした。

個々の子どもへの寄り添いの実現方法は、「個々の子どもの個性や成長についての職員間の共有機会」が最も多く五二・九%、次いで「日々の保育の振り返り機会」が四九・二%でした。

また、保護者アンケートによれば、施設にもっと増やしてほしいと思うことは「体を動かす

~~~~~

図表①「個々の子どもに寄り添った支援」の状況（保育者調査）

こと三三・二%が最多、次いで「子どもの意見を聴くこと」二九・〇%でした。個々の子どもへの寄り添いの視点から、子どもの個性に関する情報の保護者への提供状況について質問したところ、個性に関する情報は、九三・六%の保護者が知りたいと思ってい

ることが明らかになりました。しかし、それらの情報が施設から「よく提供されている」割合は二六・四%にとどまりました。

これらの結果から、保育者・保護者ともに「子ども一人一人に丁寧にかかわること」「子どもの意見を聴くこと」を重視したい気持ちは共通ですが、現状は理想ほど実現できていないというギャップを感じていることがうかがえます。「子ども一人一人に丁寧にかかわること」等は多くの保育者が理想とし心掛けてはいますが理想ほど十分には実現できておらず、職員間のコミュニケーションや日々の保育のフィードバックにより、個々の子どもへの寄り添いが可能と考えていることが推察されます。

保育者間にとどまらず、保育者・保護者間で子どもの個性に関する理解を深めることで子どもを中心に関係者のコミュニケーションが向上し、一人一人の個性や成長度合いを関係者が共通認識を持つことになり、結果、一人一人に寄り添った支援が実現しやすくなると期待されます。

\* 記事に関するお問い合わせは  
@ml.jri.co.jpまでお願い致します。